

フォーラム《北海道写真とアーカイブ》

●申込受付/シンクロシステム (KOMURO) 011-622-5788 Facebook/開設後受付

2017年12月17日(日)

● 9時30分ー13時

● 札幌市立大サテライトキャンパス
札幌市中央区北4条西5丁目アスティ45・12階 TEL011-218-7500

● 参加費=1,000円 (一般)
500円 (学生)
(資料代と写真研究 PHOTON+ 含めて)

●ゲスト講演者

(メディアアーキテクト、札幌市立大学デザイン学部 講師) 須之内元洋
[デジタルアーカイブ・プロジェクトの可能性]

(写真・映像研究、九州産業大学芸術学部写真・映像メディア学科教授) 大日方欣一
[写真アーカイブの実践
——武蔵野美術大学《大江清利アーカイブ》、新潟大学《地域映像アーカイブ》を中心に]

(写真史・写真史、明治大学理工学部教授) 倉石信乃
[アーカイブとモノキュメントー開拓写真考]

●クロストーク [北海道写真の前提とアーカイブの展望]
須之内元洋、大日方欣一、倉石信乃
進行/北条治夫 (PHOTON+ 主宰、掛川源一郎写真委員会 代表)

測量隊一行が区画地へ赴く途中 作者不祥 明治四四年



未来を見据えるために、この目の前の写真が過去から繋がる今の証しとしての意味が生まれる。



掛川源一郎 相撲見物 1953年 伊達

《掛川源一郎写真アーカイブ》作業と展示

2017年12月12日(水)ー18日(火)

● 天神山アートスタジオ 交流スタジオ A
札幌市豊平区平岸2条17丁目 天神山緑地内 011-820-2140

- 公開内容 (※公開時間等をお問い合わせください)
*デジタルアーカイブの作業 (スキャンと区分け整理)
*デジタル・プリンターによるプリントとピンナップ展示
- 展示におけるコンセプトイメージは、若き頃の中平卓馬が国際展「パリ青年ビエンナーレ」(1971年)に参加した時に、約1週間の実験的なプロジェクト《Circulation: Date, Place, Events》を行ったが、それに試行同伴されるように、日々、発見される写真のなかから、作業している行為者がランダムにセレクトし、プリントイメージを増殖させる《ピンナップ・スタジオ》のようなカタチで、その作業ドキュメントのスナップを併行して、展示して行こうという試みを考えている。



森正洋 デザインアーカイブ（須之内元洋） 2009年 佐賀県
大辻清司 美術家の肖像 1950年 東京下落合



掛川源一郎 駅の待合室 1953年 室蘭

●ゲスト講演者プロフィール

須之内元洋／2002年 東京大学工学部建築学科卒業、2004年 東京大学大学院新領域創成科学研究科修士（メディア環境学）、2005年よりassistant Co.,Ltd.にてデザイン活動を行なう。ソニー株式会社、サイボウズ・ラボ株式会社勤務を経て、2007年4月札幌市立大学着任。情報科学研究、プリコラージュによるデジタルアーカイブのデザイン等に取り組む。

大日方欣一／1988年筑波大学大学院芸術学研究科満期終了退学。日本写真芸術専門学校、桑沢デザイン研究所、多摩美術大学他で非常勤講師を務め、武蔵野美術大学特別研究員として大辻清司アーカイブの構築に取り組む。編著に『大辻清司の写真-出会いとコラボレーション』『今井祝雄タイムコレクション』『榎倉康二・予兆』など。2015年に九州産業大学へ赴任。

倉石信乃／1988年多摩美術大学芸術学科卒業。同年-2007年横浜美術館学芸員を務め、ロバート・フランク展、中平卓馬展などを企画・担当。重森弘滝写真評論賞、日本写真協会賞学芸賞を受賞。著書に『反写真論』『スナップショット—写真の輝き』など。『沖縄写真家シリーズ [琉球列像]』（未来社、全9巻）を仲里効と監修。2007年明治大学理工学部准教授、2012年4月より現職。

●参考資料概要

- *須之内元洋 TOKYO ART RESEARCH LAB 「デジタルアーカイブの楽しみをつくる」
 - *大日方欣一 「ひと函の過去から 大辻清司アーカイブ中間報告一」
 - *倉石信乃 photographers' gallery press no.8 「〈北海道写真〉の前提」
 - *写真研究誌 PHOTON+ 各号
 - *掛川源一郎著作本、前川茂利写真集、間世潜写真集、倉石信乃著作本、大日方欣一監修本、熊谷孝太郎写真集、小島一郎写真集成、日本写真史—1840-1945、北海道開拓写真史「記録の原点」、正田豊治ガラス乾板写真展図録、北海道写真史【幕末・明治】、自然と文化「飛騨野致右衛門と東川」、日本写真史概説、フィスコ・マライニ写真展図録、川又松次郎写真集「私の写真史」、大辻清司「写真ノート」、大辻清司フォトアーカイブ 写真家と同時代芸術の軌跡1940-1980、「事物と気配」大辻清司の写真、日本の写真家(21)「大辻清司」、日本現代写真史1945-1970、日本現代写真史1945-1995 など
- ※当日、会場にて、
大日方欣一監修書籍や倉石信乃著作書籍、掛川源一郎写真集『gen』、PHOTON+などを特別価格で販売致します。

pHotON+



移民到着 作者不詳 明治44年 小樽波止場

「〈北海道写真〉の前提」をめぐる

写真批評家倉石信乃による「〈北海道写真〉の前提」の冒頭部において、1871年以降、開拓使の委託により本格的にはじまった「北海道写真」は、1968年の「写真100年——日本人による写真表現の歴史展」編纂委員である、内藤正敏、多木浩二、中平卓馬らによって「発見」されることで、日本写真史上での存在が不可欠なものとなったと指摘されている。彼らによって、明治初期に田本研造をはじめとする写真家たちにより撮影された写真群が、イデオロギーに汚染されていないアノニマスなドキュメント=記録としての、「北海道写真」であると規定されたのだ。

同時に倉石は、明治初期に撮られた、アイヌ民族が被写体となった写真の多くは、「差別と非差別をめぐる非対称的なポリティクスの力を証言する」ものだとも述べる。被写体となった人物のポーズや構図は、明らかに支配と被支配の関係を表現しているのだ。

「写真100年——日本人による写真表現の歴史展」編纂委員による「北海道写真」の「発見」以前に、掛川源一郎や前川茂利、あるいは長万部写真道場といった多くのアマチュア写真家たちによって、すなわち、北海道内に住む写真家によって、開拓農民の生活や、戦後開拓のありさま、そしてその地にも住んでいたアイヌなどが撮られた。時代の制約はあったとしても、北海道人である写真家が、ある種の主体として、北海道とそこに住む人々を写真として可視化した。それらの写真群を、わたしたちは眼の前にしている。

田本らによる写真、掛川らによる写真、眼の前にあるこれらの写真は、撮影者であるか否かは別にしても、意識的に写真に関わろうとする者としてのわたしたちに、写真史的な幾つかの問いを投げかけるだろう。その一つは、果たしてわたしたちは、掛川らの写真行為を受けとめ、それがあるいは批判的であるとしても、幾分かでも継承しようとしたらどうかという問いであると思われる。さらにそれら写真群はわたしたちに、（われわれの、なげなしの）想像力の行き先として倉石によって提示された、「よそ」に向かって、幾分かでも遡って近づき得たらどうかという内省を促しもある。

21世紀初頭に在るわたしたちが、積極的な意味で、つまり未来に向けて、「北海道写真」に対し関わろうとするのであれば、それらの写真そのものや、それへの批評・行為などが形成してきた「北海道写真」史を読み直してみることは、必須の前提であるだろう。そしてそれは、それぞれの個別の場所で、個別の立場でなされなければならない。そこに、わたしたちが共有する困難さがあるのだと思われる。

（露口啓二）